



稱讚

二二二二号

二〇二〇年八月二日発行

暑中・COVID-19渦中

お見舞い申し上げます。

世のなか 安穩なれ

仏法ひろまれ

「親鸞聖人御消息」

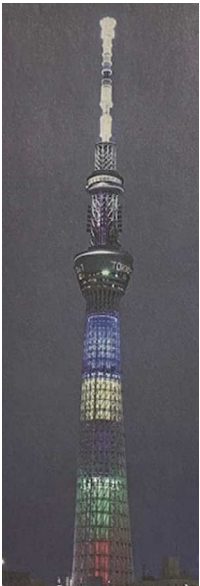
長梅雨が漸く明け、夏本番を迎えました。夏は新型コロナウイルスの感染は弱まると聞いておりましたが、日に日に感染が広がっており、皆さまのご心労、ご心痛如何ばかりかと拝察申し上げます。

また、先の九州豪雨では、七十六名の方が亡くなられ、三名が行方不明、千四百名以上の方々が避難を余儀なくされ、コロナ禍、復旧も難しい中、生活されておられますことにお見舞い申し上げます。

秋になれば、ウイルスはもっと活発化するとのこと、この夏、熱中症予防にもご留意いただき、引き続き、不要不急の外出、三密にならないようご注意ください。

発行 浄土真宗本願寺派 稱讚寺
〒二二一〇〇七五
東京都足立区一ツ家三丁目五番二〇号
TEL 〇三―五二四二―二〇二五
FAX 〇三―五二四二―二〇二六
HP shousanjii.com

来年開催に延期された東京オリンピック・パラリンピックも、私はチケットを購入しているのですが、来年も開催は無理なのではないかと思ってしまうました。



が、スポーツの日」の前日、新国立競技場に池江選手が「希望の炎」を掲げて、来年、必ずオリンピック・パラリンピックが開催出来るようにアスリート、関係者の方々の願いが語られました。

それを見て、勝手に来年もオリンピック・パラリンピックは出来ないと言っていたことは、私自身は「どうでもいいや」ようにでもなれ」と他人事、投げやりな思いでしかなかったことかと恥ずかしくなりました。

この時期、「希望」を持つことは、私たちの塞ぎがちになっている心に、明るさを届けてくれるようです。

そして、それが実現出来るように、自分が出来ることに徹しようと思えるのでありましょう。

大方は私たちの抱く「希望」は全ての方の「希望」とは限りませんが、世のなか安穩なれ 仏法ひろまれ」の言葉は、親鸞聖人自身のお言葉ではあっても自分の都合での「希望」ではありません。



「希望の炎」と池江選手

阿弥陀さまのお心をいただくということは、個人的な「希望」を持つことは異なるように思われます。「編集後記」に続きます。

合掌

新曆のお盆 (歓喜会) 法要

去る七月十六日は、新曆のお盆というこ
とで、「のんのん法話会」に併せて、「歓
喜会」の法要をいたしました。

お参りは、中木原さんだけでありまし
た。この日は、中木原政志さんの丁度四十
九日にも当たりました。

おつとめは、「伝説阿弥陀経」中にお焼
香をしていただき、引き続き、「正信
偈」を拝読いたしました。少し「盃蘭盆」
のお話をいたしました。最後に、「み仏に
抱かれて」を歌いました。

参拝用机 一個ずつ、シールドで囲んでお
りましたが、中木原さんお一人だったの
で、その席のシールドは外して、参拝いた
だきました。



礼拝所
は、机を十五
席並べている
のですが、机
一つずつに
シールドを設
置すると、暑
苦しいように
も思えます。
これから、
益々暑くなり
ますが、新型



コロナウイルスも第二波の感染が始まって
いるようですので、この一年は、シールド
を付けたままにしたいと思います。

また、ご参拝しやすいように、これまで
は靴のまま入れるようにしておりました。
が、衛生上のことを考えまして、靴を脱い
で頂くように、靴箱をシールド作成で余っ
た段ボールで作ってみました。
まだ換気の課題が残っておりますが、



八月の旧曆のお
盆 (盃蘭盆会)
には、安心して
ご参拝いただけ
るよう準備したいと思ひます。



旧曆のお盆 (盃蘭盆会) 法要のご案内

おおい
私の情で練える。南無阿弥陀仏 ね、
おおい
阿弥陀さまの念が私と包んでくださる
証と味わいたい

日時 八月十六日 (廿) 午後二時
日程 一四〇〇 おつとめ
一四四〇 法話
一五二〇 恩徳讃・解散

感染症と差別

ハンセン病差別を通して I

登尾唯信 (同和教育振興会評議員)

感染症差別

現在、新型コロナウイルス感染症の拡大について、さまざまな偏見や差別問題が起こっている。

1月16日に日本で初めての感染が確認された。その翌月、2月19日、福岡市の地下鉄の中でマスクをしていない乗客がせきをした。別の客が非常通報ボタンを押して、電車が止まった。後に二人は和解したが、既に過剰反応が始まっていた。また、マスクをしていてもせきをするといやな顔をされたり、呼吸器系の既往症や花粉症の人は困ったことになっている。感染が拡大するにつれて、更に偏見・差別が広がっている。

中でも医療関係者、配送業者など医療や物流に関わる人々やその家族への偏見、差別が問題となっている。院内感染のことを批判されたり、商品を届けた運転手が除菌スプレーのようなものを吹きかけられたり、子どもが学童保育を断られるなど、多くの人権差別問題が起こっている。

また感染した人の個人名や住所を聞き出そうとする問い合わせが行政に寄せられ、行政が人権について配慮するようにと注意を喚起している。

ハンセン病差別問題

感染症に関する差別について、ハンセン病に罹患した父を持つ、社会学博士の林力氏の体験を思い出す。鹿児島県の星塚敬愛園に隔離された父・廣藏氏

からの手紙に対する違和感である。以下、引用する。その頃わたしは、父の手紙が来ると、その内容よりも手紙にバイキンがついていないかと気になった。そのこわさは戦後、徐々にうすめられていく。とくに特效薬プロミンができた後は園内に急速に広がった。でも父の病が伝染しないもの、治るものとの確信は、一九五三年の全患協と厚生省との闘いに接するまでは持つことができず半信半疑がつづいた。恥ずかしいこと、申し訳ないことだった。いまにして父と子をそこまで引き裂いてくれたものへの憤りがこみ上げてくる。」

親子を引き裂いたものは、当時の国を挙げての無癩県運動、隔離政策であった。1907年 明治40)年の法律第11号「癩予防二関スル法律」は浮浪するハンセン病患者のみを收容する法律であった。しかし、1931 昭和6)年成立の「癩予防法(恒)」は、より隔離政策が徹底され、在宅療養中の患者も含めて、すべてのハンセン病患者を一人残らず集要する法律であった。林氏の父親はこの法律成立の6年後に入所したのである。

既に1873 明治6)年には、ノルウェーのアルマウエル・ハンセンによって、ハンセン病の原因は感染力も大変弱い「らい菌」であることが判明した。遺伝する病気でもなかった。また1943 昭和18)年にアメリカで治療薬「プロミン」が開発され、治る病気となった。

にもかかわらず、さらに法律は「らい予防法」(1953 昭和28年)と強化され、1996 平成8)年の「らい予防法の廃止に関する法律」が施行されるまで、約90年間、隔離政策は続いた。その目的は、「特別病室 重患房」や「断種」「墮胎」に象徴されるように、「ハンセン病患者を絶滅させることにある」という指摘まである。国家による徹底した人権無視の政策であり、感染症の中でもほとんど感染力のないらい菌に対する正確な知見を、国民に伝えなかった国家・行政の不作為で

あり、重大な過失であった。1998 平成10)年、らい予防法違憲国家賠償請求訴訟が提訴され、2001 平成13)年に原告全面勝訴の判決が下された。

いまもある差別偏見

隔離政策は終わった。しかし、2003 平成15)年、「ハンセン病元患者宿泊拒否事件」が惹起する。熊本県に「Y」ほる毎年恒例の「ふるさと法門事業」として、菊池恵楓園入所者の宿泊を申し込まれた熊本のホテルが、一方的に宿泊を拒否し、県側の撤回要求にも応じなかったのである。その経過の中で、元患者に対して誹謗中傷の電話、ファクス、投書が送りつけられた。その中に「世の、前世の悪業の結果、此の世に生まれ来て人々に嫌悪され」、「佛が与えた罰は、一生や、二生では、贖罪出来るものではない」とあった。これはかつて、ハンセン病は仏法を謗ったための恐ろしい「業病」であり、患者が苦しみを受けるのは自己責任であるということとを仏教経典や僧侶が説いたことがその原因であり、その觀念が今も存在しているということである。私たち僧侶の責任は大きい。

2019 令和1)年、厚生労働省の調査で、療養所を退所して社会復帰したものの再び療養所に戻った元患者が、2009〜2018年度の十年間で129人いることが判明した。その中には、後遺症に慣れた医療機関が地域に少ないことや今もって差別・偏見を恐れて周囲に病歴を明かせないという背景があると報じられている。今も故郷に帰ることができない回復者が存在するのである。療養所と教壇の関わりは長い歴史があるが今はテーマ上、割愛せざるを得ない。

(宗報) 2020年7月号より
(稱讚) 来月号につづく

親鸞聖人御誕生八五〇年

立教開宗八〇〇年

慶讃法要企画

親鸞聖人を知ろう

親鸞の生涯とその思想 【二〇七〜二二二】

非僧非俗と愚禿の名のり

山崎 龍明

非僧非俗の名のり

親鸞の「非僧非俗」の名のりは、みずから選んでのものではない。流罪という事実が外発的なものが理由であったことは、ひかればすでにとある語からも知られる。つまり、当時僧尼を規定していた僧尼令違反者として断罪された以上は、僧でもなく俗でもない」ということである。

日本の古代律令 国家は「僧尼令」を制定した。この法令によれば、僧尼は権力への奉仕、国家の加持、祈祷等を使命とすべき者の集団でなければならなかった。この道に違背する者は僧侶ではなかった。このような非本来的な仏教観によって、専修念仏者たちは弾圧されたのである。それが僧尼令というものの実質であった。

いずれにしても、政治と一体化した当時の聖道自力仏教との決別は、擬制から脱却して本来

の仏法に生きる新たな出発点となった。ここに非僧非俗の仏法者、親鸞が誕生した。当時の国家（権力者）が仏教（者）をどのように見ていたかということについて、親鸞は明確に示している。

五濁邪悪のしるしには
僧ぞ法師といふみ名を

奴婢僕使になづけてぞ
いやしきものとさだめたる

五つの濁りにそまつたよこしまな世のなかであることのしるしには、僧とか法師と

いう、本来尊い名前を、あたかも召使いを呼ぶ名のように、いやしいものとしてい

る）
仏法あなづるしるしには

比丘・比丘尼を奴婢として

法師僧徒のたふとさも

僕従もの名としたり

世間のひとが仏法を軽んずるしるしには、比丘・比丘尼を奴婢として使い、尊い法師、僧徒の名をいやしい者を呼ぶ名としている）

『正像末和讃』 六十六歳作）にはこのように記されている。

なかでも「愚禿悲歎述懐和讃」の奥書には酷しいことばが記されている。

已上十六首これは愚禿がかなしみなげきにして述懐としたり。この世の本寺本山のいみじき僧ともうすも法師ともうすもうきことなり。

いうまでもなくこれは、当時の南都（奈良）北嶺（比叡山）をはじめとする伝統仏教教団および僧侶に対する徹底批判である。

一言でいえば、仏法が本来の立場を忘れ、国家と一体化して、自己と人びとの救済を忘れている現実に対する熾烈なプロテスト（抵抗）である。婢僧非俗の名のり以後、親鸞は独自の、そして闊達な「本道を歩みはじめた。それは、さきに記したとおり、浄土の真宗は証道いま盛んなり」という世界の実践でもあったといえよう。

配流の地、越後での求道と伝道、妻・恵信尼との生活が具体的にいかなるものであったかをうかがい知ることはできない。が、念仏者として互いに手を携えての越後生活であったことは、想像にかたくない。

「愚禿積の鸞」の名のりが意味するもの

その後家族とともに関東へ向かい、およそ二十年の歳月を送る。この二十年間にはかなり広範囲な伝道活動がなされたようである。高田の真仏、鹿島の順信、横曾根の性信といった念仏の同朋を核として、関東の地に念仏の輪がひろがっていった。同時に、念仏者同士のさまざま

来の法 (真実) によって照らされ、映し出された等身大の自己 (わたし) のことである。

このような自己の実相を「煩惱具足」といい、「罪悪深重」といいあてたのである。

それは謙遜でも、卑屈な人間観でもない。わたしたち人間というものの真実のすがたである

といえないだろうか。「煩惱具足」とは貪り

欲望」と瞋りと愚痴 (道理に暗い) に満ちあ

ふれている自己ということである。ことばをか

えていえば、どこまでも自我をふりかざし、自己都合のみで日常を生きる迷妄なる生活者とい

ってよい。

そして「罪悪深重」とは、煩惱を主体としてさまざまな行為をなし、なんら省みることのない無自覚なる人生を生きる者のことである。親鸞はこのあたりを『教行信証』に、

餓とはみずからかえりみて恥じることであり、愧とはひとに向かつて告白することである。また、慚とはひとに対して羞じると

である。これを慚愧という。慚愧のない者はひととは名づけず畜生という。

と「涅槃経」を引用して述べている。「和讃」にも「無慚無愧のこの身にて／まことのこころはなけれども」と記している。「煩惱具足」

罪悪深重」「無慚無愧」という人間規定は、一言でいえば「愚」ということである。この

「愚」への諦観と目覚めをうながしたものが阿

彌陀如来の本願そのものであった。

いま、濁世といわれる状況のなかでわたしたち人間が回帰すべき世界は、この「愚」という

点にあるのではないか。人間の果てしない傲慢と貪りが、人間を喪失させ、世界を崩壊させてしまった。「愚」に還ることによって見え

なかつた世界が見え、己れの誤謬もまたあきらかになり、新たな地平がひらかれるであろう。

人間は人生を生きる視点を低くしたとき、

いっさいが認められ、尊ばれる安穩な世界が現出する。そこから、国家や民族、人種、宗教、文化、性別等々を超えたいのちのつながり、連帯が生まれる。親鸞聖人の願い、それは、

御念仏ころにいれて申して、世のなか安穩なれ、仏法ひろまれとおぼしめすべしとぞ、おぼえ候ふ

(親鸞聖人御消息』第二十五通)

ということばに示されている。世の安穩は仏法から」という。三木清氏は「法あるによつて世間の道もいで、出)くるのである」前掲書)と示したことをわたしはここで想起する。

その逆ではない。世の安穩」は降ってわくものではない。わたしたちが「歩一歩築きあげていくものなのである。仏法の真理 (法) に

しっかりと腰を据えながら。それが親鸞のわたしたちへの永遠のメッセージであるといえない

だろうか。

それにしても非僧 批判) 非俗 自立) のことばの意味するところは重い。

一九九五年、地下鉄サリン事件が起きてから数か月が過ぎたころ、テレビ・ディレクターだった僕は、現役のオウム信者たちを被写体にしたドキュメンタリーを企画した。しかしロケ二日が過ぎた段階で、テレビ局上層部から撮影中止を命じられ、最終的には契約を解除された。

テレビ局関係者がこの作品の放送を拒絶した理由を、その時点で僕は明確に把握できていなかった。でも今ならわかる。撮影中止となったテレビ・ドキュメンタリーはその後に自主制作映画となって公開され、観客たちのオウムの信者があんなに普通だとは知らなかった」との感想を、納戸も聞いてきたからだ。

確かに彼らは普通だ。少なくとも僕よりはるかに善良で優しく純粋だ。でもテレビはこれを伝えない。テレビの前の視聴者が、そんな情報を望んではいないからだ。



我が親鸞像 森 達也氏

真と偽のあいだの領域

あれほどに凶悪な事件を起こした彼らは凶暴であるはずだ」との思いがある。願いたいってでもいいかもしれない。テレビを代表とするマスメディアはこれに抗わない。だから当時も今も、マスメディアがオウムを語るときは、教房凶悪な殺人集団か、洗脳されて自分の感情や判断力を失った不気味な集団、という二つのレトリックに限定される。この二つのレトリックに共通することは、彼らが自分たちとはまったく異質な存在であるということだ。

こうして地下鉄サリン事件以降、テレビを境界としながら、こちら側の善とあちら側の悪の純度が激しく上昇した。善良で優しく純粋な彼らが、なぜあれほどに凶悪な事件を起こしたのかを考えるべきだったのに、その思索や洞察を拒絶したこの社会は、善悪二元化をみずから促進し、邪悪で危険な人や集団が存在しているとの思いに憑依された。オウムが地下鉄にサリンを撒いた理由がいまだに不明なことも、他者に対する不安と恐怖を激しく喚起した。人びとの罪責感急激に上昇し、許せない」との思いが強くなった。つまり厳罰化だ。その究極の形である死刑を多くの人が求めはじめた理由はここにある。

だからこそこの社会は、急激なセキュリティ強化と厳罰化の流れにすっぱりと埋没した。みずから善なるものと思ひ込む人々は、マスメディアによって不安と恐怖に煽られながら、どこかにいる悪なる人々の存在に怯え、一人でいることが怖くなり、集団への帰属や強権的に管理統制されることを望む。だからこそ集団の規律やルールに従わないものに対しては、自己責任やKY（空気読まない）などの言葉を使って

排除をはかる。

その前提にあるものは治安悪化。ところが二〇〇七年の殺人事件の招致件数は戦後最低だった。つまり治安は悪化などしていない。でもこの事実を知る人は少ない。街には犯罪者がはびこり、十代少年は凶悪化し、多くのテロリストがこの国で潜伏活動をおこなない、外国人労働者のほとんどは殺人犯予備軍で、北朝鮮や中国などは隙あらばこの国への侵攻の機会をうかがっている、ほとんどの人は思い込んでいる。なぜなら実際には治安が良くなっていることを、メディアが積極的に報道しないからだ。報道しないその理由は、危機を煽ったほうが視聴率や発行部数は上昇するからだ。つまりこれもまた近年のこの国を覆う市場原理の帰結でもある。

まとめよう。一九九五年のオウム事件をきっかけにして、この世界には理解不能ほどに邪悪な個人や集団が少なからず存在しているとの社会は思い込んだ。不安や恐怖を煽るメディアが、この傾向を加速した。その帰結としての過剰なセキュリティは、人の心に安心を与えない。実質は逆だ。不安と恐怖はますます増殖し、余裕を失った人々は多様性や複雑さを嫌い、単純化・簡略化された情報ばかりを好むようになる。あらゆる現象は、善と悪、右と左、敵と味方、黒と白など二分化を促進され、その狭間を失ってゆく。

そんな時代状況だからこそ、親鸞におけるもっとも有名なフレーズ「善人なおもて往生をとぐ。いわんや悪人をや」が提起する視点は重要だ。でもおそらくこのフレーズを使う人は、僕以外にも多くいるはずだ。だから今のこの状況に対しての提言として、僕は親鸞のもうひと

つの言葉を挙げることにする。

「真偽偽」（教行信証）
普通の熟語としては「真偽」だ。でも親鸞は真と偽の二分化にとどまらない。真と偽のあいだに仮という領域を設定する。二つの両端に引き裂かれたこの領域こそが、僕たちの営みの場所なのだ。親鸞は喝破する。僕は解釈している。善と悪を二分化などできない。その狭間にこそ僕たち衆生の営みと実存があるのだとていうように。

親鸞は矛盾を整理しない。なぜなら矛盾そのものがこの世界なのだから。解答を明示もしない。わかりやすい解答の危険性を認識しているからだ。

だからこそ善悪二分化を加速するばかりの今のこの国において、彼が呈示した思想と視座は大きな意味をもつ。

森達也氏プロフィール

一九五六年、広島県呉市生まれ。映画監督、作家。明治大学情報コミュニケーション学部特任教授。テレビ・ドキュメンタリー作品を多く制作。一九九八年、オウム真理教の現役信者を被写体とした自主制作ドキュメンタリー映画「A」を公開。ベルリン国際映画祭に正式招待され、海外でも高い評価を受ける。二〇〇一年、映画「A2」を公開し、山形国際ドキュメンタリー映画祭で特別賞・市民賞を受賞する。著書に『A3』 講談社ノンフィクション賞『下山事件』 東京番外地『オカルト』 死刑』 守べての戦争は自衛意識から始まる』 我々はどこから来て、どこへ行くのか』 『テロに屈するな！に屈するな』 など多数。

稱讚寺 行事予定

二〇二〇年 八月の行事予定

※「不要不急」の外出はお避けください。

- 二日 日曜礼拝 午前九時
門信徒の集い 午後二時
- 六日 月 のんのん法話会 午後二時
- 九日 日曜礼拝 午前九時
- 六日 日 のんのん法話会 午後二時
孟蘭盆会法要
- 一三日 日曜礼拝 午前九時
- 一六日 水 のんのん法話会 午後二時
- 三〇日 日曜礼拝 午前九時
親鸞聖人を知ろう 午後二時

※ご家庭でのお盆法要を希望の方は、
ご連絡ください。

へいわ たいせつ
平和 大切なのは

こころ よくしりよく
心の抑止力

二〇二〇年 心のももしび」八月カレンダーより

二〇二〇年 九月の行事予定

- 六日 日曜礼拝 午前九時
門信徒の集い 午後二時
- 三日 日曜礼拝 午前九時
- 六日 水 のんのん法話会 午後二時
- 二〇日 秋季彼岸会 午後二時
- 一六日 親鸞聖人を知ろう 午後二時
- 一七日 日曜礼拝 午前九時

二〇二〇年 十月の行事予定

- 四日 日曜礼拝 午前九時
門信徒の集い 午後二時
- 六日 火 のんのん法話会 午後二時
- 二日 日曜礼拝 午前九時
- 六日 金 のんのん法話会 午後二時
- 八日 日曜礼拝 午前九時
- 一五日 親鸞聖人を知ろう 午後二時
- 一六日 月 のんのん法話会 午後二時

※毎週日曜日は、日曜礼拝の後、一〇時より「書いて味わう会」書道を開催します。どうぞ、ご参拝ください。

編集後記

希望とか 目標 願いを持つことは、生きる上で、必要不可欠で、大事なことだと思います。この間、ご本人が自ら、一人の医師に「安楽死」を依頼し、執行されたことが、囑託殺人事件として報道されました。

安楽死を依頼した方は、筋萎縮性側索硬化症(ALS)を患い、自ら動く事が出来ず、自宅で二十四時間介護を受け、栄養は胃瘻(いろう)によってなされています。コミュニケーションはインターネットを通して行われていたそうです。

私はチャットとテレビで聴いたのですが、〇〇してあげているとか、もっと感謝しなさい」と言われていた? 本当にそう言われていたのか、自暴自棄でその方がそう思われていると感じてのことかわかりませんが)ことが「安楽死」を選んだ一因とも思いました。

希望は生きる上で必要不可欠と申しましたがこの方は、死ぬことが希望、死を希望するということは、絶望」と言うこととも言えます)だったのでしょうか。否、生きたい」との希望があったと思いますが...

私は「安楽死」には否定的な考えですが、いざ、身内がそれを希望したら、また自分自身がそういう状態になったら、どうするか、よくわかりません。しかし、阿弥陀さまは、私が自ら抱く「希望」がどんなことであろうが、また、絶望」しなくても、いつも私の「いのち」そのものを温かく包んでくださっていると味わっていきたいと思います。

二〇二〇年度 稱讚寺門信徒会費

年会費 六千円

振込先 城北信用金庫 一ツ家支店

名義 浄土真宗本願寺派 稱讚寺教会

代表 北村 信也

口座 普通 6176051